

2015年 9月 No28

巻頭エッセイ

「果報者」

副理事長 小林征司

国立病院のベッドで眠れぬ夜が続いていた。辛い検査の後で担当医師から思いもかけない宣告。「病名はバージャー氏病、動脈の閉塞による血行障害が痛みや痺れを発生させ、長時間の歩行が不可能。難病に指定されています。これ以上悪化すると足の切断も・・・」治療の出来ない難病、足切断。二十九歳の自分の身に起こったこととは信じられない現実。

そんなとき隣のベッドの老人に声を掛けられた。「よく眠れないようですね。」私は自分の病気や漸く歩き始めたばかりの長女のこと、生命保険会社の営業所長としての仕事のことなどを話した。聞いてもらうことで少しでも楽になりたかった。

彼は大工をしていた四十代のとき仕事上の事故がもとで下半身麻痺となり、動かすことも感触も失い、車椅子とベッドの生活を四十年近く続けていた。だが、その眼には四十年も下半身麻痺を耐えてきたとは思えない静かな優しさがあつた。

・・・「良く分かります。私も事故にあってから毎日死ぬことばかり考えていました。一方で家族はもちろん医師や看護婦たちにも当たり散らしてイライラと恐怖をごまかそうとしました。でも、そんな私を誰も責めませんでした。いや、反対に慰め励まし続けてくれたんです。何故そんなに優しくしてくれるのかが分からず、同情されている自分が嫌でそのことでまたイライラしました。

ところがある日、車椅子で売店に行こうと外来の待合所の前を通った時、小走りに駆けてきた5～6歳の女の子のバッグが車椅子にぶつかってしまったんです。

その子がビョコンと頭を下げて「ごめんなさい」と謝ってくれたんです。その時その子の腕に小さなガーゼが止められているのが見えたので「注射したの？」と聴きました。

「うん、咳が出て少し熱があるからってお母さんが連れてきてくれたの。先生に会った後で看護婦のお姉さんに聴かれたの“少し痛いけどお注射すると咳とお熱治るからね。頑張れる？”って。だから頑張るからって決めて注射したの。痛かったけど位かないで看護婦さんのお姉さんに“ありがとう”って言えたよ。おじさんも“ありがとう”って言ってる？

小さな女の子に聴かれて私、気が付いたんです。怪我をする前の自分がどれほど思い上がった傲慢な人間だったかということ。いくら詫びても足りないことばかりしてきた。それなのにそんな我儘を皆は許してくれた。怪我をしたおかげで本当の人の優しさに触れました。素晴らしい人に囲まれ続け私はなんという果報者か」・・・

「果報者」この状況の、この人からこの言葉を聞かされて私は目が覚めた。学び続けよう。もっと強く。もっと優しくならなくては！たとえ足を失くし車椅子の生活になろうとも、誰かの心の杖になれるように。✦ ☆ ✦ ☆ ✦